

## 令和2年度第2回米子市総合教育会議 概要

### ■日時

令和3年2月9日（火）午前10時から11時30分

### ■場所

米子市役所本庁舎5階 議会第2会議室

### ■議事

- (1) すべての子どもの学びの保障
  - ア GIGAスクール構想の実現に向けた取組
  - イ 不登校児童生徒への支援
- (2) コミュニティスクール

### ■出席者

市長 伊木 隆司  
教育長 浦林 実  
教育委員 金山 正義  
教育委員 上森 英史  
教育委員 荒川 陽子  
教育委員 三瓶 文乃

### ■オンライン参加

米子市立義方小学校長 神庭 誠

### ■出席職員

総合政策部長 八幡 泰治  
総合政策部総合政策課長 長谷川 和秀  
総合政策部総合政策課まちづくり戦略室長 伊藤 昭裕  
総合政策部総合政策課係長 宮本 朋子  
教育委員会事務局長兼教育総務課長 松田 展雄  
教育委員会事務局教育総務課教育企画室長 後藤 京一  
教育委員会事務局学校教育課長 西村 健吾  
教育委員会事務局学校教育課担当課長補佐 山下 英  
教育委員会事務局学校教育課担当課長補佐 西山 渉  
教育委員会事務局生涯学習課長 木下 博和  
教育委員会事務局学校給食課長 山中 敦子

### ■傍聴者数 3人

■ 議事（1）すべての子どもの学びの保障 ア GIGA スクール構想の実現に向けた取組

《事務局》

本日は、義方小学校とリモートでつなぎ、学校の声が届けていただきたいと思います。また、学習用タブレット端末を使った授業を体験していただく。

《神庭校長》

GIGA スクールについては、夏休みの間に通信環境を整備していただき、各教室に端末を収納するキャビネットを設置していただいた。年度末までに端末が配備されるとのことだが、4 月からはすべての学年で 1 日 1 回は端末を活用する時間を設定しようと考えている。2 学期の途中から教員の研修を行っており、活用に向けた取組を進めている。

（模擬授業） 教員役：西山担当課長補佐、児童役：市長、金山委員

①漢字を組み合わせて別の漢字を作る

②未来の仕事について考える（例：将来 AI に置き換えられる仕事は何かがあるか）

《荒川委員》

可視化できることに大きな意味があるのではないかと。それぞれの動きが全員で共有でき、先生方にとっても効率が良く、とてもいいと思った。

《上森委員》

ICT 教育については学校や教員によって取組に差があったが、GIGA スクール構想により一斉に取り組むこととなった。このツールを使って子どもたちが世界で活躍できる大きなチャンスを得たのではないかと。

《三瓶委員》

デモンストレーションで面白いと思ったのが、黒板で漢字のシートを組み合わせようとしたとき、大きさまで変えることができないけれども、タブレットなら可能ということ。子どもたちの柔軟な頭で表現の可能性が増えていくのではないかと。とても楽しかった。

《金山委員》

楽しいと感じた。基本はどの子どもも楽しく使うこと。毎日どの子どもも端末に触れる体験がたくさんできるといい。

《市長》

子どもたちが楽しみながら学習することが大切だという思いがあって、デモンストレーションを行ったが、率直に楽しいと思った。最新機器なので、画面がきれいだとつきやすいと思う。子どもたちが楽しむことで勝手に遊んで上達していくということになれば素晴らしいと思った。

《教育長》

教育委員会としては、どんどん触れて、慣れていくというのが最初の目標。そして、よりよい授業の展開について事例をたくさん集めて、切磋琢磨しながらより高いレベルの教育に導いていきたい。

米子市では8月から教員の研修会を行っているが、各学校でも前向きに取り組んでいる。教育委員会でも各学校の様子を見ながら適切な支援を続けていきたい。

#### 《神庭校長》

ある校長先生が、GIGA スクールについて明治の学制公布以来の大改革ではないかと言われたが、本当に大きな変化だと思っている。まずは、教員も子どもも慣れるところからスタートしなければ。従来の指導方法にICTの要素を加えて、より一層教育の充実を図ることがGIGAスクールの中心的な課題だと思っている。教員には教材研究や指導方法の改善が求められ、そこに技術をどう結び付けるかが課題。

#### 《荒川委員》

これはあくまで道具であって、慣れ親しむことも大切だが目的は学びに繋げること。先生方の研修が充実して行われているが、引き続きしっかり取り組んでいただきたい。また、ICTの導入によりどう良くなったかという検証がいずれできるといいと思う。それから、健康面について、視力の低下等が懸念されているが、これによって子どもの健康が害されることがないように健康への影響についても見守っていただきたい。

#### 《市長》

これを十分に活用して教育の充実に繋げていただきたい。また、健康面については大切なことで、台湾の事例では、視力低下を抑えるために1日に2時間か3時間外遊びをさせるような工夫がされている。ぜひこのことについても、気に留めていただきたいと思う。教育の成果はいつ出るかわからない。先生方には、この道具を使って、子どもたちと一緒に工夫して楽しんでいただきたい。そこから成果に結びつくと思う。

#### 《上森委員》

自分の会社で、パソコンを導入したとき、規制をせず、社員に自由に使ってもらった。楽しんで使って、慣れてきたころに自ずとルールが出来てきた。決められたルールでなく、自分たちが作ったルールで運用したほうがよいのではないかと。子どもたちにも、楽しんで使いながら、問題が起きた時に先生方と一緒に解決し、ルールを作りあげていけば1年後はみんな楽しく端末を使えるようになっていたのでは。

#### 《荒川委員》

クラスの雰囲気づくりが大切。画面を共有することで、普段発表しない子の意見が聞けたことが発見だったという報道があったが、発表したくない子もいるのではないかとと思うので、クラスの雰囲気づくり、信頼を築くことを大切にしていきたい。また、引き続き情報モラル教育にもしっかり取り組んでいただきたい。

#### 《教育長》

実際使いだすと色々な課題が出てくると思う。最初からやり方を決めていくのではなく、現場の声、社会情勢を見て徐々に進化させていく。先生、子ども、保護者、地域の方などみんなと一緒に作り上げていければ。色々な課題が生じるだろうが、変化にうまく対応していくような教育をしていきたい。

#### 《市長》

子どもたちに楽しんで使ってもらえるように。課題が生じてくるのは想定内なので、ひとつひとつ着実にクリア

していけるよう。また現場の声を聞かせていただければと思う。

■ 議題（１）すべての子どもの学びの保障 イ 不登校児童生徒への支援

《事務局》

配布資料に沿って説明。

《神庭校長》

不登校に関して、義方小は市内で一番不登校児童が多いのではないかと考えており、一番大きな課題と捉えている。担任任せにするのではなく、加配の教員、養護教諭や教頭など何人もの教員で対応している。アセスメントシートや外部機関が入ったの会議を重ねながら、対応を進めているところ。事務局の説明のとおり、不登校の理由について、本当のところがつかめない。学級や先生が嫌なわけではないと言われる。本校では、人間関係やいじめが原因ということはほとんどなく、本人自身も理由が分からない状態で何日も休みが続くケースが圧倒的に多い。一方で改善している子もたくさんいる。学校の環境や家庭の状況の変化によって良くなったり悪くなったりする。試行錯誤しながら進めているところ。

《金山委員》

米子市では、不登校の要因として「不安」「複合」が大きく、きっかけのうち本人に係る状況でも「無気力・不安」が一番大きいとのこと。様々な不安要因があると思うが、いかにして子どもの不安を取り除いてやれるかということ。子どもの不安要因は昔と変わっているのか現在の状況を聞いてみたい。

《神庭校長》

不安ということでは、長期にわたって欠席が続いている児童は、登校を再開したとき、周りの目が気になって教室に足が向かないといことがあるようだ。休むきっかけははっきりしないが、休みが続くことで出て来にくくなる。この漠然とした不安というのがどこから来ているのか分かりづらい。

《市長》

私の仮説だが、教員の多忙感に続いて、「子どもの多忙感」というのが以前と違ってあるのではないかと。私が子どものころと違って、課外で遊ぶ機会が減っていて、また児童生徒には様々な課題が課せられており、それが何か心に重くのしかかっているといえるのではないかと。課題をこなす一方で、校庭で体をいっぱい使って遊ぶ時間を大切に、学校が楽しいところだと思ってもらおうということも必要ではないかと思う。要因ははっきり分からないが、仮説をもって、大きな枠組みで捉えてやってみようという考え方があっていいのではないかと。

《三瓶委員》

不登校に関して、HSC（Highly Sensitive Child）という言葉がある。とても敏感な子ども、敏感すぎるゆえに何気ない友達の一言に敏感に反応してしまう子どもたちが増えているとのこと。HSCの子どもはストレスが加わるほど不登校になりやすい傾向があるということで、米子市版のアセスメントシートによって、子どもたちそれぞれの不安要因を引き継いで行けると期待している。そして、このアセスメントシート自体を育てていくという形にしていけると、この先、どんな時代にあっても有効に活用できるのではないかと。

#### 《金山委員》

幼保小連携あるいは小中連携の効果があつたとのこと。米子市では小1ギャップ、中1ギャップがかなり改善しているので、次はこの「不安」を減らすことを考えていってほしい。

#### 《荒川委員》

不登校について、個人的には米子市にとって最重要課題だと捉えている。資料に多様な学びの場の保障として ICT 活用による自宅での学びやフリースクールが挙げられているが、できれば義務教育のうちは学校に行けるようになってほしいという思いが強い。

米子市の取組として、例えば検診のときなどにプラスアルファの子育て支援をしていただけたらいいのではないか。市長と同じく、ICT 教育と並行して外遊び、運動して夜は寝るとということが重要だと考えている。ICT 機器の発するブルーライトの影響でメラトニンの分泌が抑えられるということも分かってきているので、睡眠の重要性などを小さいうちから保護者に説明できる機会があれば。また、鳥大医学部の学生にボランティアを募って、勉強を教えてもらうことができないか。地域とのかかわりで違う経験や学びができるのではないかと感じている。

#### 《市長》

子育て支援については市長部局と連携して取り組みたい。学生ボランティアについては、一部取り組んでいるものもあるので、充実させていければと思う。

#### 《上森委員》

米子市では、アセスメントシート導入以前から、先生方は子どもたちの記録を取っておられ、いじめについて対応してこられた。アセスメントシートの活用によって、子どもたちの不安の解決の糸口になることを期待している。

#### 《教育長》

不登校については、ひとりひとり全部違うということで個別対応を行ってきており、このアセスメントシートが一つの切り口となっているが、このアセスメントシートから仮説を立てられるようにしたいと考えている。幼保小連携や小中連携も仮説に基づく取組であり、次の取組についても仮説を立てる必要がある。例えば、来年度「米子市学びの支援推進会議」といったものを立ち上げ、いろいろな方々と話し合うということに取り組みたい。アセスメントシートによる個別対応の一方で、アセスメントシートから読み取れる仮説、関係者の感じる子どもの変化や対応、いろいろと意見を出し合って取組を進めたいと考えている。

#### 《市長》

学校現場の苦労や努力されている様子がよく分かったので引き続きお願いしたい。

課題に対応するだけでなく、仮説をもって、子どもたちに不安を覚えさせる暇がないくらい遊ばせる、疲れさせる、寝させる、といった方法もあるかもしれない。かつて、日本が働くことしか選択肢がなかった時代にはなかったが、いま豊かになって迷いや不安を覚えるということもある。

また、フリースクールについても、第2の学校というイメージだけでなく、リフレッシュできる場として学校と役割

分担できれば、教員の負担解消にも繋がるのではないか。これについては、次の課題として皆さんと考えられればと思う。

## ■ 議題（2）コミュニティスクール

### 《事務局》

配布資料に沿って説明。

### 《神庭校長》

小1ギャップ、中1ギャップについて、学校と家庭とのギャップと捉えられないかと考えており、地域がそのギャップを解消するキーとなるのではないかと考えている。地域の人たちは、子どもたちを10年20年と見ていく。今、いろんな課題を抱えた子どもたちを健全に育てるのに地域の力は欠かせない。コミュニティスクールが軌道に乗れば、不登校の問題も改善するのではないかと期待している。

課題としては、本校の場合、住民の構成が年を追って変わっていくということ。保護者の方自体も地域とのかかわりが薄くなってきている。本校で導入するとき、どんな方をお願いして、どんな組織にしていくのかというのが課題だと考えている。

### 《金山委員》

先ほどの議題とも繋がるが、いま流行している「鬼滅の刃」のアニメを見て、主人公が家族や地域、敵に対してまでも温かさをもっており、人に対する愛情や、誰の命も大切にすることが一貫して伝わった。こうした姿勢を見習って、「温かさ」を感じられるコミュニティスクールにできるといいと感じた。

この度、尚徳中学校区、淀江中学校区で導入することとなったが、それぞれの地域で特長があるので、それを活かしてほしい。

### 《三瓶委員》

子どもたちが地域の方と知り合える、というのがコミュニティスクールの一番の利点だと考える。子どもと地域の大人が交流するようになると、地域全体が良くなっていくのではないかと。先生方には導入時には負担がかかると思うが、いずれ軽くなると思う。実際始まってから、効果や課題が見えてくると思うので、勉強会が継続して必要だろうと思った。

### 《上森委員》

学校運営協議会の良し悪しによって組織が機能するかが変わってくる。また、いろんな方の意見をまとめる地域コーディネーターの役割が本当に大切になると思う。学校、地域の方、教育委員会、すべての力を合わせてコミュニティスクールを成功させたい。

### 《荒川委員》

モデル校区として出発することとなったが、どれだけの市民に周知されているのか。市報などで広報することだが、地域の方の理解が大切。新しいことを始めると、学校の負担になるのではないかと考えてしまうが、そうではなく、組織を整えることなのだとして教えていただいた。これをうまく地域の方に周知していただきたい。

先生の負担が軽減されることを期待しつつ、教室にしながらオンラインで地元企業と繋がることも、あるい

は地域の方の力を借りて子どもたちが学習することもコミュニティスクールだと感じる。地域を挙げて子育てに関わっていく米子市であってほしいと思う。

《教育長》

米子市では、地域ごとに違いがあること、また、実を取るためにじっくり取り組む必要があると考え、全市一斉という形をとらなかった。来年以降、推進協議会の委員や学校の理解を図り、それから保護者や地域の方に知らせていく。そしてその状況を市民の皆さんにお知らせしていくことを考えている。やりながら進めるということもあろうかと思う。周知について来年度以降強化していこうと思う。

《市長》

これから手探りでやっていく部分もあると思う。地域によって形は違えど、これまでも学校と地域は繋がってきた。この繋がりをベースとして、学校の課題を地域と役割分担しながら、コミュニティスクールが円滑に進むよう支援していきたい。